

切兼曾我

ワキ 梶原景季

トモ 景季従者

シテ 曾我祐信

ツレ(母) 兄弟の母

ワキヅレ(二同) 護送者および太刀取

子方 一万(十郎)

同 箱王(五郎)

ワキヅレ 早打

地は 相模

季は 雑

ワキ詞 「是は鎌倉殿に仕へ申す。梶原源太景季にて候。さ
ても曾我の太郎祐信は。我君御心安き者に思し召
され候ふ所に。伊藤入道祐親が孫。一万箱王を養
ひ置きたる由聞し召され。成人の後頼朝が敵とも
なるべき者をと希代の事に思し召し。某に召し連
れて参れとの御誂を蒙り。唯今曾我へと急ぎ候。
如何に誰かある。

トモ詞 「御前に候。

ワキ 「急ぎ案内を乞ひ候へ。

トモ 「畏つて候。

トモ詞 「如何に此内へ案内申し候。

ツレ詞 「誰にて渡り候ふぞ。

トモ 「梶原源太景季の参られて候。此由御申しあつて賜
はり候へ。

ツレ 「心得申して候。如何に申し上げ候。梶原源太景季
殿の御出でにて候。

シテ詞「此方へと申し候へ。

ッレ「畏つて候。其由申して候へば。此方へ御出であれとの御事にて候。

ワキ「心得である。

シテ詞「思ひよらざる御出で珍しうこそ存じ候へ。先づかうく御通り候へ。さて唯今は何の為めの御出でにて候ふぞ。

ワキ詞「何と申すべきやらん。御為めゆゝしからぬ御使に

参りて候ふ其故は。故伊藤殿の孫養育の由聞し召され。末の敵なれば急ぎ供して参るべしとの。御使を蒙り参りて候。

シテ「仰せ畏つて承り候ふさりながら。妻子に縁なき者。祐信に過ぎたるはよもあらじ。玉くじけ蘭枯れ。衰朽の夢を見しよりも。せめては憂きをも慰む便りぞと思ひ。兄弟を五つや三つの時よりも。母もろともに迎へ取り。実子の如くそだてつゝ。事か

りそめとはいひながら。はや十一と九つ。年頃よりは健気にも見え候へば。折を得て君へも申し上げ。御家人の数にも交じへ。父の名跡をも継がせばやとこそ。兼ねては存じ候ひし。此頃斯かる仰せを蒙るべしとは。思ひもよらず候ふと。

地「涙を抑へ悲しめば。母は余りの心にや。唯茫然とあきれけり。実にや生きとし生ける物。子を悲しまぬ者やある。梁の燕野の雉。子故に身を忘れ。

哀猿腹わたを断つ悲しみ。いま目の前にあはれなり。

シテ「よしや思へば何事も。

地「報いの罪の今さらに。誰をかさして恨むべき。親子の契り麻衣。袖に余れる涙の。身も絶えなんと父母は。歎きに沈むばかりなり。く。

ロンギ地「実に理と思へども。今は時刻も移るなり。はやく出だし給へかし。

母「母は余りの悲しさに。日頃頼みし観世音。誓ひの
船の梶原よ。君に宜しく申し上げ。兄弟を助けた
び給へ。

ワキ「さすがに我も親心。思ひやらるゝ袖の露。おさへ
かねたるばかりなり。

シテ「祖父伊東が悪逆を。思し召し給ふとも。いまだ幼
き者なれば。など御許しなかるべき。

ワキ「実に道理なり梶原が。何とぞ申し兄弟の。

地「命ばかりは助けんと。さも頼もしき言の葉の。
露の情を便りにて。泣きてとゞまるあはれさよ。
く。

一同一声「若草の。上もたわゝに置く露の。消えを争ふけし
きかな。

地「道芝の。露も涙も分けかぬる。く。羊の歩み隙
の駒。蘆辺の田鶴も音を添へて。あはれもよほす
波の音。由比の汀に着きにけり。く。

ワキ詞 「如何に祐信に申し候。某身に替へてもと存じ。色々言葉を尽し候へども。君御憤り深く。殊に工藤祐経の申し条有るにより。誅し申せとの御錠にて候。今は思ひ切られ候へ。

シテ詞 「曾我を出でしより斯くあるべきとは存じ候へども。余りに母にて候ふ者の嘆き候ふ程に。梶原殿を頼み申してこそ候へ。此上は是非なき事。某も思ひ定めて候。いかに兄弟急ぎ敷革に直り候へ。

如何に申し候。とても御芳志に某が手に懸けて。せめての供養に仕りたく候。

ワキ 「いかやうとも御心に任せ候へ。如何に太刀取祐信へ太刀を参らせ候へ。

太刀取 「畏つて候。

シテ詞 「如何に兄弟。とても遁れぬ道芝の。露の命を惜しまずして。最期を清くたしなみ候へ。

一万詞 「愚かの父の仰せやな。死せん命は露程も。何かは

惜しみ申すべきさりながら。年頃の御恩をも。い
さゝか報ずる事もなく。空しく三途に帰らん事。
まことに無念に候。

箱王詞

「なふ兄上。我等兄弟が最期の体を見物とて。さし
もの由比の浜までも。処せきまで見えて候。潔く
父の御手にかゝり。黄泉路とやらんにとく参らう
ずるにて候。

シテ

「あな申したり申したり。それ梅檀は二葉より芳ば
しとは御事等が事にて候。成人の後さぞと思へば。
目も暗れ心乱れつゝ。

地

「何くをそことわきまへず。唯くれくとあきれし
が。時刻移してかなはじと。太刀取り直し立ちけ
れど。足弱車よわくと。力も尽きてかなはねば。
太刀投げ捨て、伏しまろび。害してたべと叫べど
も。太刀取も切り兼ねて。唯さめぐと泣き居た
り。

早打詞「なふく暫く御静まり候へ。御ゆるしの状を賜は
り。畠山殿の御使に参りて候。是々御覧候へ。」

ワキ詞「あらめでたの御事や。急ぎ拝見申さうずるにて候。

何々一万箱王が事諸国の大名小名。殊には重忠さ
へぎり申さるゝによつて。二人の命を助け。重忠
に預け置く所なり。かゝるめでたき事こそ候はね。

シテ詞「誠に御厚恩いつ忘るべきとも存ぜず候。

ワキ「実に尤道理なり。さらばめでたき折柄に。和歌を

詠じて酒宴をなし。急いで舞をまひ候へ。

シテ「万代の。松にぞ君を祝ひつる。

地「千代の陰添ふ若緑。(男舞)

地「愁ひの眉も忽ちにく。開くる花の盃取りぐに。

慶賀の礼儀互にのべて。是までなりと暇申し。兄
弟引き連れ父諸共に。帰る心を。何にたとへん唐
衣。着つゝ馴れにし故郷に。帰る事こそうれしけ
れ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著